

# 欧米における地域開発の印象

## ◇百聞は一見に如かず

四十日間わたる欧米旅行の最後、私たちはハワイのホノルル国際空港からジャパンボに乗り込み、東京へ向かった。機上で、私たちは私たちの旅の最後にふさわしい象徴的な事件に出合った。

ジャパンボには映画上映の施設がある。私たちの乗った日航機はロスアンゼルスから飛んできたので、あたかも大阪では万国博も開催中とあって、沢山のアメリカ人が乗っていた。映画はまず戦国日本

の人間絵巻「風林火山」が上映され、それから京都を素材にした日本の美が極めて芸術的なタッチで写し出された。

私たちは日本の、京都の、美しさも醜さも知っている。しかし、映画はそんなことにはおかないしに、日本的な美意識の極致をこれでもかこれでもかと描き出していった。

機上のアメリカ人の中には、はじめて日本を訪れる者も多かったであろう。これらの人々は映画を見て、いま自分たちが向いつつある日本に、恐らくは桃源郷のような幻想を抱

ネーデル・ノルマルム地区の都市再開発(ストックホルム)



き、胸を踊らせて期待したに違いない。映画はそれほど美しいものであった。私は京都の寺院の欄間彫刻の華麗なクロージアップ写真を見ながら、アメリカ人の姿に四十日前の自分を見いだしたのである。

欧米に関する私た

ちの知識は、一般の欧米人が日本について知っている程度と比べたら比較にならないほど大きい。しかし、それにもかかわらず、私たちが日本にいて得ることのできる欧米の情報は、極めて限定された部分的なものである。また彼らに東洋に対するエキゾチズムがあるように、われわれには明治以来培ってきた西歐崇拜のぬきがたい精神風土がある。

今回の欧米旅行を前に、私は幾つかの文献を読み、視察ポイントであるベルリングロイユやファルスタなどの郊外都市、デファンスの新都市建設、イギリスのニュータウンなどについて、ある程度の知識を持つことができた。本を読んだ限りでは、日本ではとても真似のできないような素晴らしい都市開発が行われているように感じ、夢のような未来都市を訪れる気持であったが、それらの新都市の多くは思ったよりも質素で、日本でもその気になればやってやれないことはない程度のものであった。

またロンドン、パリ、ローマといったヨーロッパの大都市についても、写真や歴史の書物、美術書などを通じてあこが

県企画部企画課長補佐田嶋喜一氏は、第七回国土総合開発海外視察団(財団法人国土計画協会主催)に参加、欧米十ヶ国の地域開発状況を視察して、さきごろ帰国した。この報告は、その旅の印象を総括的に述べたものである。

## ロンドン郊外ステープニッツ・ニュータウンの歩車道分離



れのイメージを抱いていたが、それも京都と同じように美しいところもあれば汚いところもある。要するに人間の住む街

であった。

われわれが日本にいて限られた情報から構成する欧米像は、例えば熊本城と水前寺公園と阿蘇と天草の写真を見て、熊本を想像するようなものである。「百聞は一見に如かず」という古い諺があるが、私たちのような駆足旅行においてさえ、実際にその場に行くと、全体の中で部分を見るということ、部分の価値を全体の中で正しく認識するということの意味は、はかり知れないものがあると思

## ◇広々とした土地

旅行者にとって、地図は空想の翼であり、旅のコースを調べたり、見知らぬ土地で自分のいる場所を確認する以上のものである。

私はヨーロッパの地図を見ながら、漠

然と山や平野のつらなる風景を想像していた。しかし、実際にヨーロッパに行ってみると、スエーデン、デンマーク、オランダ、ドイツと十日あまりは山を見ない日が続いた。日本では東京にいても遠くに山脈を望むことができるが、パリやロンドンでは高いところに登っても山は見えない。私たちはスイスに来てはじめて、山あり谷ありの自然環境に接し、故郷に帰ったような落着きを覚えたものである。

広々とした土地、これは日本がヨーロッパに及ばない唯一のものであるだろう。ヨーロッパ唯一の人口密度を誇るオランダの農村でさえ、日本の農村の濃密な村落分布と比べたら、まるで過疎地帯を行くようであった。私たちはまた、工部ロットルダムを訪れ、ユーロポートの臨海工業地帯を見学したが、ヨーロッパ

最大の石油精製工場群を取り巻く広大な緑地帯に、羨望の眼を見開いたのである。

## ◇豊かな社会資本の蓄積

西欧はギリシャ、ローマの時代から石造建築物の国である。私たちが欧米の都市の姿に圧倒的な豊かさの感じを抱くのも、その大部分を石造建築物の重量感に

負っている。

しかし、実際にこれらの都市に立ってみると、戦争による破壊の激しいベルリン、ロットルダムなどの都市を除いて、建ち並ぶ石造建築物の壁面は黒ずみ、耐用年数の長さを感じさせた。重量感というよりも、時の重みに耐えている巨人、王者の老年を感じさせた。

その意味で東京丸の内とその界限は、世界のどこに出しても恥ずかしくない都市美の集積を示していると思う。しかし、言うまでもなく丸の内は東京のほんの一部に過ぎず、もっと詳細に比較していくと、欧米の都市では電線はすべて地下溝に納められ、下水道の発達、広大な都市公園、舗装された道路、街路樹、地下鉄など、社会資本の蓄積には目を見張らせるものがある。

このような社会資本の蓄積は、いつごろから開始されたのであろうか。パリの下水道や、ロンドンの地下鉄の歴史の古さは周知のことである。私たちはニューヨークのセントラルパークやサンフランシスコのゴールデンゲイト公園が、およそ百年の歳月をかけて不毛の地に築かれた話を聞いた。私はまた、帰国してから歴史の本を調べ、二十世紀初頭のニューヨークの写真を見したが、その写真にはビルの谷間に蜘蛛の巣のように電線が張りめぐらされていた。

わが国は明治以来、西欧文明に追いつ

くため、電灯はつけばよい電話は通じればよいという態度で発展を遂げてきた。幾度かの戦争によって、資源を消耗してもきた。しかし、いまや日本は、自由世界第二の経済大国として、経済は発展すればよい時代ではなくなっている。GNPの時代からストックの時代へ、日本は拡大した経済力を背景に、これから大きく転換していく必要があると思

## ◇立体的な都市計画

西欧における都市計画の伝統は、石造建築物とともに古く、私たちはその実例

新官庁都市エウルにて (ローマ)

